

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 22 日現在

機関番号：84602

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720365

研究課題名(和文)古墳時代における埴輪生産と製作技術系統の研究

研究課題名(英文)Production and technology system of Haniwa in the Kofun Period

研究代表者

東影 悠(Higashikage, Yu)

奈良県立橿原考古学研究所・調査部調査課・主任研究員

研究者番号：60470283

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古墳時代の畿内の埴輪製作技術を中心に、製作技術系統と生産組織の実態を分析した。これは、畿内から各地への埴輪製作技術の波及の様相を明らかにするための基礎的研究である。その結果、畿内各地での埴輪製作技術系統は前期後半以降に明瞭になること、当該期に生産組織の大幅な再編が認められることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this study, focusing on Haniwa techniques of Kofun Period, I analyzed the actual situation of production organizations and the genealogy of production techniques. This is a basic study to clarify aspects of spread of Haniwa techniques in Japan. As a result, I discovered that the genealogy of production techniques emerged and production organizations were reconstituted in the latter half of the early Kofun Period.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学 埴輪 製作技術 製作技術系統 生産体制 手工業生産 古墳時代

1. 研究開始当初の背景

古墳時代研究において埴輪は、古墳の年代決定をおこなう重要な要素ととらえられ、編年研究が盛んにおこなわれてきた。また、古墳における儀礼のあり方を解明するためにも重要な資料であると考えられてきた。さらには、古墳時代の手工業生産の中でも古墳の築造と密接にかかわっていることから、その生産の背景には政治的側面をとらえることも可能であるとの認識がなされてきた。近年では製作技術の諸属性や使用工具といったミクロな視点にたつて埴輪製作者あるいは生産組織を抽出するという研究が積極的に進められている。

また、埴輪生産を含めた古墳時代の手工業生産は、社会的分業を表すものとして国家形成とのかかわりのなかで論じられている。特に畿内から他地域に埴輪生産が波及することは従来から多く指摘されており、その背景に王権と各地のつながりといった政治的側面を認めることが強調されてきた。

近年は「王陵系埴輪」という概念なども提唱されてきており、王権の中心地から各地へと波及した埴輪生産と生産組織の実態がより明らかになりつつある。しかしながら、埴輪生産あるいは製作技術の波及元である畿内の埴輪生産については、製作技術系統の検討・整理が十分におこなわれているとはいえないのが実情であった。

研究代表者は畿内の古墳時代後半期の埴輪生産のあり方を分析するなかで、製作技術に地域的まとまりが認められること、一方で規格には地域を越えた共通性が認められることなどを明らかにしてきた。そして古墳の階層性と採用される埴輪の規格には、王権の動向が密接に関連していたとみられることを指摘した。

このような分析をはじめとして、これまでの研究成果をふまえると、畿内内部にも多系統の埴輪製作技術が存在することは明らかであった。畿内から各地への埴輪生産の波及にかんして、王権とのかかわりの有無、あるいはその強弱といった点を明らかにするためには、畿内の埴輪製作技術系統の実態を検討することが必要であった。

以上のように、畿内の埴輪生産の製作技術系統を明らかにすることが、各地へ波及した埴輪の実態を解明するためにも欠かせない分析視点であり、また王権と各地とのつながりを実証するうえでも重要であると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の主な目的は、前項のような先行研究における問題点を解決するために、畿内における埴輪製作技術系統の実態を解明することにある。まず、王権の中心地である畿内の埴輪製作技術を分析しその系統を識別すること、生産組織の単位を明らかにすること、などを主たる目的とした。対象とした資料は

主に古墳時代前期から中期のものであり、各時期の製作技術系統と生産組織の特徴を把握し、その変遷過程を明らかにすることを目指した。

埴輪製作技術系統を正確に把握することは、生産組織の実態解明のみならず、これまでの埴輪編年の検証などともかかわってくる重要な視点である。なぜなら、技術系統が異なればそれぞれの技術が変化する時期や変化の方向性が異なる可能性もあるとみられるからである。技術系統という視点によって、従来の編年研究を検証することで、埴輪生産組織の変革の画期についてもあらためて検討をおこなうことが可能になると考えられた。

このように、畿内からの埴輪製作技術の波及が王権とどのようにかかわっていたのか、また王権と各地域との影響関係の強さが時期ごとにどのように変化したのかを明らかにするための基礎的な研究方法を確立することを試みた。

3. 研究の方法

本研究では埴輪の製作技術系統について分析をおこなうため、古墳出土資料を収集し、それぞれの製作技術を観察・記録することとした。そのため、まず関連する発掘調査報告書や論文などの文献収集と資料集成をおこなった。

本研究の対象は畿内であり、古墳時代の王権の中心地であったとみられる奈良県および大阪府の資料を中心に、前期および中期の資料を対象として資料集成と分析をおこなった。特にヤマト王権の大王墓が営まれたと考えられる纏向・柳本・大和古墳群、佐紀盾列古墳群、古市古墳群、百舌鳥古墳群出土資料を主たる分析対象とし、また各時期の大王墓とみられる大型前方後円墳の出土資料を分析の中心に据えた。そのほかにも、補足資料としてそれら古墳群周辺の資料についても必要に応じて分析対象として扱った。

主な分析視点は、埴輪の製作技術を総合的にとらえながら、各時期の特徴を抽出することである。それらを時期的、地域的、階層的差異などをふまえたうえで分類し、製作技術系統として識別することとした。

資料収集によって得られたデータについては、それぞれの所蔵機関において資料を観察・実測・写真撮影などを実施することにより製作技術系統の特徴を抽出し、その系統整理をおこなった。調査によって得られたデータについては、それらを比較検討するための基礎資料としてデータベース化を進め、活用可能なように整理をおこなった。

4. 研究成果

本研究では、円筒埴輪および各種の形象埴輪についてそれぞれの製作技術および形態などの特徴を明らかにし、それらを系統づけるとらえることを試みた。

円筒埴輪の製作技術については、前期前半の纏向・柳本・大和古墳群において主要な技術の多くが認められることが注目される。つまり、前期後半以降にもつながる基部の粘土板成形あるいは突帯の設定技法である刺突や断続凹線、凹線、ヨコナデといった各種の製作技術が前期前半の段階から認められるのである。

前期後半以降もこのような円筒埴輪の主要な製作技術は継続して使用されており、そのほかにも、ヒレ付き円筒埴輪のヒレの形状やハケ工具による外面調整、内面調整などの諸要素が前期前半と前期後半において共通、あるいは継続しながら変遷していった状況が読み取れる。つまり、円筒埴輪の製作技術を大局的にとらえた場合には、ひとつのまとまりとして製作技術の変遷をとらえることが可能である。

従来認識されてきたような前期前半と後半に大きな技術的画期や変化があるのではなく、大枠ではひとつの技術体系が徐々に刷新されていったというのが実態ではなかろうか。ただし、こうした大枠での技術体系のなかにも異なる系統として認識できるものがあることには注意が必要である。

例えば、円筒埴輪全体の形状などに注目すれば、紫金山古墳（大阪府茨木市）と松岳山古墳（大阪府柏原市）から出土した三角形透かし孔を有するヒレ付き楕円筒埴輪同士の共通性は高く、地域を越えた生産組織の活動を読み取ることが可能である。一方でこうした特徴を有する楕円筒埴輪はそのほかの古墳では認められない。

紫金山古墳に時期的、地理的にも近接する将軍山古墳（大阪府茨木市）でこのような楕円筒埴輪が認められないことは重要である。将軍山古墳で認められる、口縁部形状が外反し長方形透かし孔を有するものは寺戸大塚古墳（京都府京都市・向日市）や茶臼塚古墳（大阪府柏原市）、新山古墳（奈良県北葛城郡広陵町）などで認められる。

つまり、異なる地域で同系統の生産組織が埴輪を生産したとみられる一方で、同一地域においても異なる技術系統の生産組織が埴輪を製作した状況が認められるのである。

そのほかにも、全体の形状や製作技術、ヘラ記号などの諸特徴から上の山古墳（奈良県天理市）と萱振1号墳（大阪府八尾市）出土埴輪はそれぞれ共通点が多い。これらはその特徴から、同一の生産組織によるものと考えられる。

このように、円筒埴輪の特徴は、透かし孔の形状と配置や全体の構成によりよくあらわれているようであり、そこには地域的傾向を読み取ることにも可能である。纏向・柳本・大和古墳群周辺では三角形透かし孔を千鳥状、あるいは突帯の上下で一直線状に配置するものがあり、また長方形透かし孔を突帯の上下で千鳥状に配置するものなどが多い。佐紀盾列古墳群では、長方形透かし孔に加えて

円形透かし孔が突帯を超えて上下一直線状に配置されるものが多くを占める。

こうした大和の状況に対して河内では、三角形透かし孔を一段に千鳥状に配置するものが多く認められる。埋葬施設から出土した副葬品の特徴から前期後半に位置づけられるとみられる庭鳥塚古墳（大阪府羽曳野市）などでもこうした事例が認められることから、比較的古いとみられるような特徴を有する系統の埴輪が前期後半にも継続して生産されていたと考えることが可能である。

もちろん各資料の時期的差異も考慮しなければならないが、こうした形態の特徴に地域的傾向が認められる、あるいは地域を越えて共通性のある資料が点的に認められることは重要である。体系的な製作技術は共通しながらも、各地域あるいは各古墳群を超えて個別に共通する同一の製作技術系統とみられる埴輪が認められるのである。

一方、中期になると、佐紀盾列古墳群と馬見古墳群などの大型古墳群において非常に類似した埴輪が認められる状況になる。特に器財や家形などの形象埴輪にこうした点がよくあらわれている。

また、古市古墳群と馬見古墳群において類似した埴輪が認められることは、津堂城山古墳（大阪府藤井寺市）と巢山古墳（奈良県北葛城郡広陵町）出土例からも明らかである。つまり、中期には埴輪生産組織が前期に比べてより統合された状況になったと想定されるのである。ただし、このような状況は窠窠導入以前に認められるのであり、窠窠導入以降にはこれとは異なった状況に変質したと考えられるものの、こうした点についての詳細な検討は今後の課題である。

以上のように、本研究では古墳時代の前半期を中心とした分析をおこない、畿内の埴輪製作技術系統の実態について明らかにしてきた。今後は、後半期の状況についても同様の分析をおこない、前半期との比較検討、さらには埴輪生産組織と文献史学が指摘する「部民制」などのかかわりについて検討をすすめていく必要があると考える。

本研究で分析の対象とした埴輪以外にも、「威信財」など古墳時代の王権と各地域の関係をあらわす器物は多数ある。こうした背景もふまえたうえで、王権と各地の政治的関係をとらえることが課題である。

また、土師器や須恵器、木製品などといったそのほかの手工業生産の研究も近年は積極的に進められている。これら古墳時代の器物生産の中での埴輪の位置づけについても明らかにしていく必要がある。日本の国家形成史のなかでの古墳時代の手工業生産の位置づけにかんする検討については今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 東影 悠、「墳墓から見た古墳時代成立過程」、『新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』、査読無し、2013年、23 - 32頁

〔学会発表〕(計1件)

1. 東影 悠、「墳墓から見た古墳時代成立過程」、『考古学研究会関西例会30周年記念シンポジウム 新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』、2013年11月30日、大阪歴史博物館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

東影 悠 (HIGASHIKAGE YU)

奈良県立橿原考古学研究所・調査部調査課・主任研究員

研究者番号：60470283

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし